

## 第7回 アートインビジネス研究会 要旨

日 時：2024年7月11日（金）18:00～19:30

会 場：同志社大学今出川キャンパス良心館 経済学部棟3階第一共同研究室

テーマ：職人の目からみたラグジュアリー

講 師：林美木子氏(はやしみきこ 有職彩色絵師)

1966年、重要無形文化財『桐塑人形』保持者(人間国宝)である林駒夫の長女として京都に生まれる。84年、京都市立銅駝美術工芸高等学校日本画科卒業。86年、京都芸術短期大学日本画コース卒業。翌年、丸平大木人形店で人形彩色絵師の仕事始める。父である駒夫に師事しながら、有職彩色絵師として、平安の古より連綿と続く伝統的な有職の貝桶、貝覆、檜扇をはじめ、有職大和絵による板絵などの作品を制作。以後、個展やグループ展を中心に幅広く活動。2018年「ブルガリア ウローラ アワード 2018」を受賞。著書に『王朝のかたち』(猪熊兼樹共著・淡交社刊)がある。

伝統的な有職彩色絵師としての職人技と文化の継承を中心に語られた。本職としての彩色絵師の仕事の流れ、歴史的背景、技術の詳細、そして現代における職人の立場や挑戦について深く掘り下げている。林美木子氏の語る有職彩色絵師としての40年以上にわたる経験は、伝統技術の継承、職人としての矜持、歴史的・文化的背景の深い理解、そして現代社会における伝統工芸の位置づけを包括的に示している。作品制作の細部にわたるこだわりや、伝統文化の尊重と革新のバランスが鮮明である。

### 有職彩色絵師としての仕事と背景

彩色絵師は京都に多く存在し、友禅や仏具の彩色など多様な分野があるが、林美木子氏は特に有職の雛人形の彩色を専門としていた。彩色師の仕事は絵の具を使って絵を描く部分に特化し、40年前は分業制度が確立していたため、彩色だけに専念できた。当時は職人が籠飼と呼ばれる形で他店での仕事を禁じられ、仕事の内容や勤務先を口外できない厳しい環境であった。

バブル期には大量の注文があり、手間のかかる特注品も多く、忙しい日々を送ったが、人間らしい働き方や他の道具への関心から独立を模索。大和絵という平安時代からの伝統技法を用いた彩色を追求し続けたが、伝統を重んじる業界の中で仕事を干される経験もした。

林氏は平安時代のお雛様の道具に関わってきたから、平安時代の女、子供の小物を作っているつもりだった。ミニチュアを作っていると、本物は、本当はどうだったんだろう、人間はどういうものを見てたのか、本当のお姫様、どういうもんで遊んでいたのか、大きな興味が湧いた。たとえば、お雛様のサイズの貝桶はお雛様の手の大きさに合わせ

て、ハマグリを使うが、成人のものは10cm以上ある。

## 大和絵の伝統と技術

大和絵は奈良時代から平安時代にかけて日本独自に発展した絵画様式で、道具や屏風、襖などに用いられる。西洋的な日本画とは異なり、茶道具や香道具にも使われる技法であるが、若い世代には継承が難しい絶滅危惧種の技術となっている。

触らないと絶対にわからないことがある。で、触ると、次から偽物が見破れるようになる。たとえば蛤。彩色に用いる蛤（はまぐり）は伊勢湾産にこだわり、薄くて丈夫な貝の特性を生かし、貝合わせという伝統的な遊び道具を制作する。重なり合ったときの音の良さや素材の選定に細心の注意を払い、伝統の技術を守りながら制作している。

## 職人としての矜持と制作哲学

林氏は自らの存在を消し、作品に命を吹き込むことを職人の使命と考える。作品は作者の個性よりも物自体が持つ力でお客様と対話すべきであり、アーティストステートメントや自己主張を極力避ける姿勢を貫いている。自分のことを言わないことがかえって仕事を生むってということもある。発信しないから来る仕事がある。

また、作品は一点物ではなく、同じ品質で複数制作可能であること、失敗の定義は多様であり、個性として受け入れられるべきと考えている。

## 伝統の継承と現代の課題

現在は一人で制作をこなし、アシスタントもいないが、娘と息子が一部の技術を継承し始めている。弟子を取ることや教育機関での教鞭を執ることには慎重で、熱意のある人でなければ伝統技術の継承は難しいと述べる。

また、伝統技術は時代に適応しつつも、軽視されることが多く、偽物や粗悪品の流通に対して憂慮を示している。

## 伝統工芸品の具体例と制作過程

雛人形の小物、檜扇（ひおうぎ）、糸花、犬箱、張り子などの制作過程や意味合いについて詳細に解説。例えば、檜扇は持つ人の身分により描かれる絵柄が決まり、蝶や鳥の模様には守護の意味が込められている。また五色とよく言うが、有職は六色。桃色が京都の有職の一本余計に入っている。子供の道具に赤というのは、子供は赤いものを一番に見えるようになるから。お母さんの口唇の色やからという。アンパンマンがあんなに流行るのは、もうあの赤くて丸いものが子供を捉えて離さないから。そして赤という色にやっぱり厄除けとか病除けの力があると信じられてたので赤を多用する。

また、長刀鉾の鈴の歴史や鉾建ての様子、NHK 大河ドラマ用の扇子制作など、伝統行事や現代の仕事との関わりも語られている。長刀鉾の鉾建ての赤い屋根の上の赤い幕をする前の真木の部分に、実は800年前からの伝統で、長刀鉾（なぎなたほこ）だけ鈴

がついている。それを揺れた時に音がするように長刀の下には昔から鈴がついていたという。そういう時間を越えた時っていうのがすごい嬉しい。京都って歴史がありすぎて、何層にもなっている。切り取った切り口で、色々面白いけれど、何百年変わらず、でもずっと誰も何の疑問も持たずにそれをやり続けてる。あの鈴も 800 年前の音とは違うと思うが、大概300 年ぐらいいは経っている。そういう音を聞けるのがとても嬉しい。

## 美の基準と文化的背景

美とは厳しく、時代を超えて変わらない基準が存在すると考え、可愛さの概念にも独自の視点を持つ。特に雛人形は女性や子供の好みで選ぶものではなく、家長である男性が選ぶものであるため、現代の「可愛い」とは異なる美意識が重要である。美というものは厳しいもので、ただなんとなく綺麗とか、豪華とかではなく、どのラインが正解かっていう、その日本の美の基準というギリギリのところを、自分で見て、本当に線一本のところを常に考えて作らないとならない。

生け花の川瀬氏曰く、美はずっとあるもの。最初からある。それが見えてるか見えてないかだけのことだと。玉三郎さんは美のために生きている。自分の美っていうもののためだけにいかに、美しいかということだけを考えている。

また、日本の伝統色や陰陽五行思想に基づく配色の意味、子どもを守る願いが込められていることも紹介されている。色も全部意味がある。青とか緑とか白は方角を表している。あと、季節を表す。青は東、赤は南。西は黒。真ん中が黄色っていうね、これ、あの陰陽五行思想という、その色の力で自分たちを守る。また持ち主を守るっていうことが根底にある。子供を守るっていうことが親の願い、周りの大人の願いだから、その子供のためにやれるまじないは全部入れようというのが、プリミティブな配色になるのではないか。色の力。センスとか可愛いとかでなく、お守り。だから赤い色は特に力があるとされてたので、宮殿も鳥居も神社も全部赤で、コロナみたいな流行り病があったときは赤絵って言うて、赤い色だけでおもちゃの絵描いたりして、子供の枕元に置くとか、赤い色だけで作ったショウジョウの人形を枕元に置くとか。

人の考えることは、多分千年経っても全然変わってないので、子供を思う気持ちも全部変わらないから。それが変わらないもの、不変の美の要素の一つだと思う。それはもう時代関係ない。人であって、日本人であつたら自然とそうなるところがあると思う。

## 伝統工芸と現代社会の接点

林氏は SNS を使わず、あえて発信を控えることで仕事が舞い込む独特のスタイルを持つ。皇室や神社への献上品制作など、伝統的な依頼が続いている一方で、文化の継承と現代的な評価のギャップに直面している。

また、作品を通じて時代を超えた対話が可能であることを理想とし、物の中に職人の魂を込めることを重視している。500 年ぐらい前のものでもここが見せ場なんだ、これが

描きたかったんだというのは良くわかる。作家本人と会えなくても、ものを通して会話できるから、時代を超えた不変の美を持って、次の時代に残るもので、残ったその先の時代で生きている人間と話ができるぐらいの仕事がやりたい。博物館のケースの中から誰かに喋りかけられる。それが理想。